

グリーン・ニューディールと「脱成長」

写真の明日香壽川『グリーン・ニューディール』は世界を揺るがす地球温暖化、気候変動問題の国際的な潮流と課題を幅広く解説している。「エネルギー革命に乗ろうとしない日本」に危惧を抱く著者ら研究グループは「日本版グリーン・ニューディール」を提示したが、本書でそのエッセンスが紹介されている。

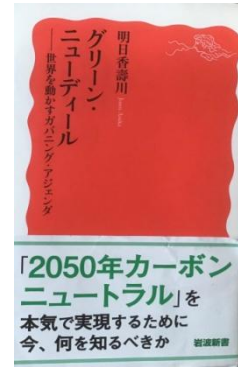
明日香氏は本書終章で「第 6 章では、誰がいつまでに、何を、という具体的なスケジュール感や切迫感が乏しい斎藤幸平氏の『脱成長コミュニズム』に対して少々厳しく批評した」と述べている。第 6 章では、斎藤幸平氏の『人新世の「資本論」』を評価しつつ、6 点にわたり問題を指摘している。これに対する斎藤幸平氏の「気候崩壊と脱成長コミュニズム」『世界』10月号を抜粋して紹介したい。

先進国はこれまでの過剰な生産と消費をスケールダウンして、エネルギー消費量や資源利用料を削減していく。それによって、途上国に経済成長の余地を確保しつつ、より平等な世界を目指す。これが、「脱成長」の要求である。脱成長の主張がいくら倫理的に正しくとも、この不公正な世界では主流派になれない。そのせいで、「切迫感が乏しい」理想論のように聞こえてしまう。これが脱成長のジレンマである。

「グリーン・ニューディール」(GND)による「環境も経済も」という路線のほうが、幅広い支持を集める可能性が高い。再エネ関連インフラへの投資拡大によって、失業問題や格差にも挑む GND であれば、企業や政治家も労働者階級も手を握る余地があるからだ。GND は呉越同舟的に結集させる力を持つ。だが、まさにこの点にリスクがある。この問題は、SDGs で考えればより一層わかりやすい。SDGs はまさに、政府や大企業から環境団体まで多様な集団がつながる結節点になっている。だが、まさにその結果として、SDGs はその理念が骨抜きにされ、「大衆のアヘン」に成り下がっている。

ジレンマを抱えているのは脱成長だけではない。GND も同じ穴の貉だ。気候危機を解決するためには、GND は大きくならなければいけない。だが、大きくなればなるほど、GND は資本主義によって骨抜きにされていく。そもそも、社会を変えるために、この間目も当てられないくらい失敗してきた資本主義システムを維持しなければいけない、というのは何とも皮肉である。真に必要なのは、資本主義に挑む新しい政治的想像力ではないか。環境問題を経済成長という資本主義のポジティブな面だけ結びつけるのではなく、人種、階級、ジェンダーをめぐる資本主義の抑圧や搾取と絡めて論じなくてはならない。そしてこれこそ、脱成長の目指すところなのである。

GND が正しいのは、環境保全「だけ」に特化するのでは足りないということだ。ここで、GND は環境と経済をつなげた。だが、必ずしも、経済「成長」とつなげる必要はない。脱経済成長と環境をつなげることも可能である。



(2021年10月16日)